

## 栽培漁業推進支援

増養殖環境課 林 芳弘

### 1 目的

高知県では作り育てる漁業を推進するため、ヒラメ、及びクマエビを種苗生産し、市町村等を通じて地先に放流しているが、中間育成、放流手法については課題が残されている。そこで、これらを解決するための技術的な支援を行う。今年度は、クマエビの放流方法における課題の洗い出しと解決に取り組んだ。

### 2 放流の状況

#### (1) 浦ノ内湾

平成 27 年 9 月 30 日、浦ノ内湾内の保育場に稚エビを放流し、中間育成を開始した。このときの稚エビの大きさは、約 44mm であった（測定は 9 月 28 日）。

同 11 月 9 日、潮位が保育場より低くなった時間帯に、保育場の水門を開放してクマエビを放流した（図 1 左）。稚エビは約 80mm に成長していた。

#### (2) 高知新港

10 月 8 日、タンク輸送した稚エビを岸壁上からホースで放流した。

### 3 今後の課題

種苗の取り上げ時、海水を排出したあとの保育場内にかなりの量の種苗が取り残されていた（図 1 中）。このとき保育場は広範囲に干出し（図 1 右）、エビは底面に取り残されていたため、人力により可能な限り拾い集めて放流したが、回収しきれなかったため、保育場に海水を注入し、後日再放流することとした。

また、高知新港への放流時にも、運搬用活魚タンクの底に多数の種苗が取り残されたことから、クマエビの放流時においては、種苗を効率よく取り上げる対策を講じる必要がある。



図 1 水門から放水している様子（左）、保育場内に取り残されたエビ（中）、水が抜かれたあとの保育場の状態（右）

なお、保育場から種苗を放流した際、多数のクロダイが水門の周囲に集まり、クマエビを捕食しようと追い回す様子が観察されたが、種苗の全長が大きかったことから、ほとんど捕食されていなかった。したがって、中間育成は、放流直後の被捕食を防止する上でも有効であると考えられた。